

ホトトギス

九月号

一千三百号
記念特集





平成十七年四月九日
新高輪プリンスホテルにて
ホトトギス巻千三百号記念祝賀会

俳句随想

〔二百七十九〕

汀子

一通の手紙を受け取った。ホトトギス誌友の藤森莊吉さんからである。関西に住んでいた頃から朗読の活躍をされていて、昨年、ラジオNIKK E Iの番組で俳句の朗読を二回放送されたそうである。その内容のプリントも添えてあった。この方のように、一人一人が何かのご縁を大切にしてい俳句の話をする機会を持つて頂けたなら、俳句というこの素晴らしいものを多くの人に知って頂く大きな力になることだろう。それは結果としてご自分の勉強にもプラスになる。

私の家に今から三十年近く前、NHKアナウンサーの吉崎圭一さんが訪ねて来られた。それから八年間、FM放送で俳句について短い話をして来た。それがNHKとのご縁を頂いた最初であった。今「NHK俳句」に毎月出演させて頂いているのもささやかな出演から始まったのである。

きつと誌友の皆様にもこのようなご縁が舞い込んで来るに違いない。その時、「私なんか……」というご返事はしないで頂きたい。藤森莊吉さんに私はエールを送っている。

句日記

汀子

平成十六年九月一日 ロイヤル俳壇

風句 ふ里山となる 稲の花
スケジュール 整理 捗る 夜長かな
風一過雲間に月を走らする
稿債のための夜長となりけり
事多き日々過ぎてをり月仰ぐ
九月四日 芦屋ホトギス会
もう容赦せぬ秋の蚊を見失ふ
あまつさへ大潮といふ野分かな
九月四日 悼村上三良様
みちのくの月 皆仰ぐ 御生涯
九月五日 下萌句会
記念樹も野分の被害まぬがれず
ワリーブロに向かひすなはち夜なべかな
溝蕎麦に隠し果せぬ水の音
みちのくの月の隠れし訃報かな
九月九日 清交社
もたらせし山の秋草活け忌日
風荒れし狭庭そのままた月夜
証叩忌日の心ありけり
青空を夜空につなぐ 夕月夜
山裾の伸びてすく 夕月夜
九月十日 工業倶楽部
荒れし日は二十十日を過ぎてより
稿積んで夜学の机辺ととのふも
山荘の秋草に皆去り難く
皆残暑耐へ来し仲間揃ひけり
厄日として日々のくらしに変わりなく
九月十一日 野分夏行 松島
青空の増えて減る 旅秋の雲
ボケットは旅の肩籠草の花
露寒と思ふ俯瞰の海の風
爽やかに申し合はせし如く違ふ

海といふ静かに見えてをりし秋
第二句会
海消して秋の夕焼消えにけり
しのび寄る夜気も露けき宿りかな
松島の昏れて露けき灯をこぼす
九月十二日 野分会夏行
寝てあても見ゆる 松島旅の秋
秋の航ふと昂りに似たるもの
秋風のとき 潮風島巡り
鷗に餌 秋風に手を乗せて待つ
九月十四日 大阪倶楽部
又出して仕舞ひて 秋の扇かな
秋扇一度も出さず 旅終る
投げ入れたいふ秋草に影生れ
蓑抱くその辺のもの 纏ひし三瓶
秋扇を使はぬ旅を戻り来て
九月十四日 綿業倶楽部
どの風も触れて放れて糸芒
仲秋の夜空仰ぎて旅にありかな
高く活けすなはち芒なりしかな
九月満ちて欠け 仲秋の空となる
九月十五日 夏潮句会
鬼灯の赤少し 榎せ 旅帰り
稿債は減らぬ 秋灯明るくて
お誘ひは一と月先の十三夜
吾亦紅には空間のありにけり
一本の電話ノ規忌の供華のこと
カレンダーに替へて客間かな
読み返すたびの灯下に親しみて
ともかくも桃むきし手を洗はねば
九月十八日 句会と講演の会
穴惑まどひて 地球温暖化
九月二十二日 有恒倶楽部
とんぼうの空抜けて来し 旅の長

人情は語り継ぐべし 西鶴忌
うたた寝も夜長仕事の一部分
九月二十一日 無名会
又うつらうつら夜なべを切り上げん
染筆の夜なべとなつてしまひけり
虫筆の所在はつきりしてをりし
雨止んでたちまち門辺虫時雨
原稿の二三残して夜なべ閉づ
うたた寝をして又夜なべつづけけり
遠ざかる足音に又虫の原
九月二十四日 時雨句会
鳴くことが命の証 鈴虫に
句碑の野のすなはち 松虫草の野
秋灯をふやせしだけのことなれど
計画の通り 改装成りし 秋
九月二十五日 北海道ホトギス俳句大会
秋雨や 鯰語ともならず 着陸す
蝦夷は 秋訪ふ 旅衣心しけり
秋冷といふもてなしのありにけり
着陸の蝦夷は 冷やかなる雨よ
九月二十五日 北海道ホトギス俳句大会前日句会
偲ぶ人 偲べば 秋の雨上る
降り立ち 釧路の秋に紛れけり
九月二十六日 北海道ホトギス俳句大会
青空の誘ふ 朝寒なりしこと
露置きて 釧路の夜明はじまりし
九月二十七日 アサヒカルチャー
露けしや 旅より 旅へ 空路あり
露しとど 釧路 湿原 望む 丘
秋雨の予報 旅路に縦いて来ず
九月三十日 きさらぎ会
青空を置き忘れたる 野分かな
又旅の計画 富士の初雪に
台風の去りて 残りし 旅の 鯰語

廣太郎句帳

廣太郎

平成十六年九月一日 夢三忌俳句大会

木道の尽き邯鄲の二重奏

紫は花野の好む色かとも

九月一日 一水会

榛名富士芒の丈に隠されし

東京の残暑引き摺る旅であり

九月二日 蕉心会

一山の噴いて震災忌となれり

夏休の宿題ちやんとやつたんか

長き夜をバスが繋いでをりにけり

会場へ向かふ残暑を貫きて

川端に秋を求めて来たけれど

秋何処や秋何処や秋何処なんや

九月五日 あかぎ広場竣工記念俳句大会

一枚の沼に秋霖吸はれゆく

淵といふ花野の黙でありにけり

雨に耐へ水澄む淵でありにけり

秋草に句碑の歳月尋ねばや

秋霖の淵ぼつねんと雨男

九月九日 土筆会

秋草の輪廻は句碑の歳月に
秋草に守り抜かれし汀子句碑

その中の白が主張をせし千草

九月十二日 NHK学園駒ヶ根全国俳句大会

秋天に嶺々稜線を正しけり

九月十六日 登高会

草の花昨夜の雫に頭垂れ

秋の海大和金剛陸奥眠る

露の玉水惑星の一隅に

秋の海雲の変幻受け止めて

君の恋秋の波間に果てにけり

露の世に新しきビル又生れ

九月十八日 ホトトギス社句会

七草に子規偲ぶ句座整へり

九月二十一日 草木瓜会

もろこしに移民せし日を語る人

玉蜀黍歯の躊躇つてをりにけり

まだ白の目立ち九月のサラリーマン

日差まだ九月を遠ざけてをりぬ

九月二十二日 目黒学園句会

鰯雲高層ビルに被さりぬ

東京都目黒区竹の春となる

玻璃といふ玻璃を彩り鰯雲

竹の春車窓に嵌めて里帰り

竹の春翁一人で守りし藪
九月二十四日 時雨会

鈴虫を鳴かせ実家でありにけり

松虫草摘めば句碑にはならざりし

秋扇バッグの中といふ天地

紫は松虫草の吐息とも

山気とは松虫草を目覚めさせ

九月二十六日 蕉心会メンバー俳句披露句会

川風といふ秋めける一とこ

秋の声三代句碑に確と聞き

秋の声六甲近づけてをりにけり

秋灯下子規の絶叫聞きし如

升さんや芦屋の残暑どないだす

俳壇に歴史刻みし人の秋

九月二十六日 虚子記念文学館投句

爽やかに子規虚子古白再会す

九月二十八日 若水会小諸虚子記念館吟行

木の実落つ音にも虚子を偲ぶ園

赤のまま句碑の歳月語るかに

秋風や小諸と芦屋繋ぐ旅

栗踏んで虚子の歩きし径を行く

雑詠 廣太郎 選

矢車に遊びごころの風が来て 窓全てあけて五月を入れにけり	岡崎 富田征也
残雪の白さが山を高くする 大牡丹散つて宇宙に一余白	西予 濱永宗一
桐咲いて村々に水走り出す 奈落よりムンクの声す薪能	同
東京の花見新幹線で着く 花人へ都営大江戸線に乗る	熱海 嶋田一步
地下鉄を出れば花あり皇居あり 今日ぐんと咲く面積の増え躑躅	同
表札は妻の名となり松の花 遅れ着く池に翡翠見し人居	同 嶋田摩耶子
深雪晴廻り舞台の如き景 雪折の音竹林の闇を裂く	仙台 小島左京
待ちかねて活断層の地虫出づ 信心のありたるごとく朴仰ぐ	同
蛇衣を脱いで光陰残りたる 河馬が気にするのは蠅が小さいから	東京 後藤立夫

燕舞ひ明日の太陽予約せり ひかり合ふ森の先頭樟若葉	大阪 境 告冬
夏暖簾肩より分けて声で入り 忌に祝ぎに思ひ出量む花衣	同
句友とは逢はずも親し花の宴 大役を果せし安堵花万朶	東京 吉田小幸
炎天の砂より逃れ海に入る えごの花落ちて弾みて散り敷きぬ	同
分け入りて十葉の香を撒き散らす 掃きこゝちよく乾きたる花の塵	横手 伊藤とほ歩
古庭の残んの花に朝戸繰る 相識らねども皆親し虚子忌人	同
廃線と決まりし車窓竹の秋 花筵ぶつきらぼうな紀州弁	鎌倉 喜多村萬城
ひとり来し吾も花人にちがひなし 弘法に見えんと蛇穴を出づ	和歌山 宇田秋思
朴の花金剛界といふところ 火の毛虫われに救ひを求めたる	明石 中杉隆世
夕さりて残花にはかに減りてをり 伝染といふ春愁のありにけり	同
春愁やちよつと甘えるよその猫 花ミモザ黄は旅の無事願ふ色	東京 河野美奇
日が育て風が深む黄花ミモザ 法王を悼み黄の濃きミモザかな	神戸 五十嵐哲也

雑詠句評（七月号より）

基子・純也・比奈夫
弘子・昭代・小木菟
ひさ志・雅・二歩
暮潮・仁義・廣太郎

教皇の御掌のあたたかかりしこと 神戸 千原叡子

教皇とは今春亡くなられたヴァチカンのローマ法王ヨハネ・パウロ二世のことを指して居られると思う。

一九八七年汀子先生及び随員のヴァチカン訪問の旅の折先生は「謁見を賜る春のヴァチカンに」

と詠まれたが、王宮の一室で謁見を頂き、句会をさせて頂く光栄に浴したのであった。作者は恐らく其の折の事を思い出され、今回教皇への手向けの御心で詠まれたのではないだろうか。

まさに「あたたか」の季題がびつたりで、教皇を述べるのに総て云い尽されていると思う。

此の千載一遇の機会を私まで賜った事、あらためて感謝し、御一緒に祈り上げたいと感動させて頂いている。（基子）

平成十七年四月に帰天された教皇ヨハネ・パウロ二世。作者はローマで直接謁見された経験をお持ちである。丁度帰天された時期を重ね合わせ、当時の思い出がまざまざと甦ってきたであろう。当時の思い出だけを素直に表現した事によって、季題が鮮明に伝わってくる。（廣太郎）

みよし野の花掬はむとひしやく星 神戸 長山あや

一目千本といわれる花の眺望のきくところは、当然のことながら、夜空も広い。そこに北斗七星を見つけた作者である。そのひしやくは、まるで吉野の花を掬おうとしているかのように見えたのである。花と星座との取り合わせ、まことに幻想的である。

（純也）

吉野の桜は毎年様々な美を我々に見せてくれる。絶景の花の夜の風景である。「ひしやく星」つまり北斗七星が空には輝いておりまるで満開の花を掬いとするような形に見えたのである。吉野ならではの星の美さと相俟って、正に花と星との物語めいた景が見事に浮かび上がっている。（廣太郎）（以下略）

天地有情

花子選

目閉づればたちまち花に遊びけり 明日といふ日もあり花に別れても 葉牡丹も茎立つものや丈揃へ あの桐の花に近づく道の無く 被災地に春風の吹きはじめけり この雨に吉野の花も散りをらむ 牡丹の渦に溺れし羽虫かな 世は事もなし牡丹の微動だに 冬籠にも文明が追ひつめる 一枚の障子が塞ぐ山気かな 花衣祝衣旅ひんがしへ 花冷の祝の余韻でありにけり 別れ霜ありと緊張はしる烟 留守の間の霜の名残でありにけり 花楓寺格を誇る一樹あり 拝観の古刹の庭の花楓 誕生日来ること確りラが咲き 紫荊牡丹桜を夢見をり	東京 同 熱海 同 京都 同 檀原 同 豊中 同 神戸 同 秋田 同 福岡 同 神戸 同	今井千鶴子 嶋田摩耶子 安原 葉 稲岡 長 瀧 青佳 山田弘子 浅利恵子 松尾緑富 後藤比奈夫
---	---	---

南禅寺界限にして初音かな 一望に夏潮の景舞子ピラ のどけしや新作能といふ集ひ 開幕を長閑に待てるドームかな 初雷のありて変りし闇の色 アンタレス星食進みある朧 春の風薬師如来のあたりより 雀の子軒を溢れてをりにけり 花八十二年見しこと誕生日 東京に父母の墓あり花曇 寂一字刻みし墓に春惜む 山居して木の芽の風に目覚む日々 降り出して音の明るき若葉雨 光悦寺おひるの静寂枝蛙 アカシヤの花の向うの町へ旅 水曲る藤の落花を乗せながら 金風の鞆を俳諧船出づる 漁場近し鯛網の蜚総立ちに	姫路 同 東京 同 神戸 同 東京 同 熱海 同 龍野 同 吹田 同 八尾 同 福山 同	桑田青虎 稲畑廣太郎 長山あや 坊城俊樹 嶋田一步 浅井青陽子 宮崎 正 岩垣子鹿 竹下陶子
--	---	--

天地有情句評

汀子

明日といふ日もあり花に別れても 東京 今井千鶴子

今、花の下にあるという至福の時間に心を置いていることで満足であるが、間もなく花に別れの時がくる。自らへの存問の句。

あの桐の花に近づく道の無く 熱海 嶋田摩耶子

桐の花を見つけた後、作者はもつと近くで桐の花の仔細を見届けたいという思いであつた。それが適わぬと知つた時の句。

被災地に春風の吹きはじめけり 京都 安原 葉

新潟で起きた大震災はその後の雪の被害が加わつて散々な災害となつた。そのような地によく春風が吹き始めた喜び。

牡丹の渦に溺れし羽虫かな 檀原 稲岡 長

花の王様である牡丹が見事に開花した。その甘い香りに寄ってくる羽虫たちはまるで牡丹の花弁の中へ入つて溺れている。

一枚の障子が塞ぐ山気かな 豊中 瀧 青佳

山のひんやりした空気を遮断してくれるのは一枚の障子である
と知つた作者。冷たい山気を隔てた部屋の温もりが想像される。

花衣 祝衣 旅ひんがしへ 神戸 山田弘子

花見の心を持ちまた祝いの心も持つている上京である。それらは華やかな装いが語り、句跨がりの表現が心の弾みを伝える。

別れ霜ありと緊張はしる 畑 秋田 浅利恵子

畑仕事にとつて季節の変動は深刻な被害に繋がる。もう無いと思つていた別れ霜があつたと緊張が走つたのである。

花楓 寺格を誇る 一樹あり 福岡 松尾緑富

この楓の木はさぞ古いものであろう。目立たない楓の花が咲いていてその一樹を見ても寺格を誇るたすまいである。

誕生日来ること確リラが咲き 神戸 後藤比奈夫

ライラックの花が咲く春甜の頃となると作者は誕生日が来ると
いうことを思い出す。よい季節である誕生日が待たれる。(以下略)